

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム(職員派遣)

平成25年度看護師海外研修報告書

研修者	職名	医学部附属病院手術部 看護師
	氏名	篠原 真理子
研修先等	渡航先国名	大韓民国
	研修先機関名	延世大学セブランス病院
	研修期間	平成 26 年 1 月 20 日 ~ 平成 26 年 1 月 29 日
研修概要	<p>初日は、看護部の教育担当者よりオリエンテーションとして病院概要・歴史・理念、緊急時の対応・手指消毒の基準の他、別館ダヴィンチトレーニングセンターの概要についての説明を受け、見学をした。ダヴィンチ手術担当コーディネーターからトレーニングルームの概要説明があり、指導医の元、ダヴィンチを使用した手術介入のトレーニングを受けた看護師がスタッフの指導に当たるという教育システムを学んだ。その他、外来棟、インターナショナルセンター・ラウンジ、小児病棟などを見学した。</p> <p>2 日目は手術室の構造や物品の配置、チーム編成についてのオリエンテーションの後、最終日までの 8 日間で 31 件のダヴィンチ手術を見学することができた(甲状腺手術11件、中咽頭手術 2 件、前立腺手術 8 件、腎摘出手術 1 件、子宮摘出術 3 件、縦隔腫瘍摘出術 1 件、腓尾部切除術 2 件、胃切除手術 2 件、小児前方切除術 1 件)。その中で完全 SPD (Supply Processing & Distribution) の導入やコミュニケーションの活用により、効率的・効果的・安全に手術看護が進められている様子を含めた実際の介入方法を見学した。</p> <p>3 日目の滅菌室見学では、医療機器の洗浄・滅菌・管理方法や手術室の器械の搬入出に関する最新のシステムについて学ぶことができた。</p>	

研修成果

現在ダヴィンチ手術はアメリカ・韓国を中心に行われている。中でも韓国では美的満足度に対する意識が高く、耳鼻科領域の甲状腺・中咽頭のダヴィンチ手術においては、延世大学セブランス病院が積極的に取り組みを行い、世界各地から多くの医療従事者がトレーニングに参加している。今回、どのような方法で「効率的・効果的・安全」に手術看護が進められているのか、また、JCI認証されている国際的病院がどのような医療を行っているかを様々な角度から学ぶことができた。

延世大学セブランス病院の手術室では、37の部屋を4つのチームに分けて担当しており、夜勤帯は看護師が5人体制でそれぞれのチーム以外の手術介助も行ってた。日勤帯は、麻酔担当看護師を配置し、麻酔導入及び気管内挿管を行うが、抜管は、麻酔科医の他に麻酔担当看護師が行うという機能別看護が取り入れられていた。夜勤帯の体制は、業務の標準化を進めることで当院でも対応が可能であると考えられる。限られた人員を効率的・効果的に活用することや業務の標準化により、より安全な医療の提供に繋ぐことができる。このような機能別看護は、看護師個々のスキルに応じた業務調整が可能である点から、手術室看護師のクリニカルラダーに合わせた教育に取り入れていきたい。

また、海外の職場環境にも興味があり、働きやすい環境を整えるためにどのような取り組みがなされているかについても学ぶことができた。看護師の休憩時間は30分であり、それ以外にも適宜休憩をとっていた。それは、次の手術患者を時間的に無駄がなく入室させるために最低限の時間で昼食を済ませ、少しの空いた時間でリラックスし、また戻るというスタイルである。業務の効率化だけでなく、看護師自身の心身のコントロールのために上手く時間を活用している様子が見えた。手術のスケジュールによっては、手術終了後に麻酔担当看護師以外の器械出し看護師と外回り看護師は、2人同時に休憩をとることができる。実際、休憩を済ませた頃には麻酔担当看護師によって次の患者の手術準備が出来ていた。入室時には、交替した麻酔担当看護師がコーヒー休憩をとる場面にも遭遇したが、当院でももう少しフレキシブルな休憩方法を取り入れることで、緊張する場面の多い現場であっても、気持ちを落ち着かせて手術看護に臨めるのではないかと思った。そして、もっと自由な発想で「働きやすさ」について考えることも必要だと感じた。

研修成果

手術室で発生しやすいインシデントの観点からも学びがあった。手術時の標本の取扱いである。標本摘出時は、清潔介助看護師が受け取り保持する。手術終了後、担当医が清潔介助看護師から専用トレーに受け取り持ち帰るため、外回り看護師の介入はなかった。標本の取り扱いに関与する人員を少なくすることで、間違いが起こる確率を減らすことができる。このような単純な作業の中でもよりシンプルに業務の流れを見直すこともこの研修で学んだ点である。その他、ダヴィンチ手術は短時間手術であるということから、身体の除圧には必要最低限の器具を使用し、直接医師が行っていた。日本では一般的に身体損傷の予防は看護師の業務として行われているが、メディカルスタッフの効率的な分業という視点から、業務を振り返る機会にもなった。

当院では、現在ダヴィンチ手術をはじめ、形成外科における再建手術、臓器移植手術など様々な内容の手術が行われている。2013年度の年間手術件数は5911件であり、外国人患者も増加傾向にある。患者への対応だけでなく、海外からの医療関係者の研修受け入れも増えており、「京大病院の医療」を紹介する機会が広がっている。世界最高水準の医療施設として、来院される方に満足していただくためには、言語的コミュニケーション能力の向上が不可欠であると改めて感じた。

今回、この海外研修を通して、看護の知識・技術だけでなく、海外のチーム医療の在り方についても触れることができたと同時に、専門職としてのプライドと患者の周手術期に携わっているという謙虚さを持って臨む姿勢についても学ぶことができた。

今後の課題は、①海外の最新のエビデンスに基づく手術看護についての伝達講習会の開催、②手術室看護師教育システムと評価方法の見直し、③耳鼻咽喉科治験におけるダヴィンチ手術の介助手順作成、である。そして、今回の経験を通して、広い視野をもって看護観を育てることの大切さを後輩たちに伝えていきたい。